

中務集注釈（四）

高野晴代・高野瀬恵子・加藤裕子
森田直美・斎藤由紀子・遠間倫世
時田麻子・曾和由記子

一九二～一九三番（遠間）。

凡例

古今集歌人伊勢の娘、中務の家集を取り上げ、注釈を試みる。本稿では、本紀要前号「中務集注釈（三）」に続き、一五五番歌～二〇三番歌を扱った。今回は、公的な歌に加え、いよいよ日常の歌も対象となり、たとえば隣人であった源順との贈答歌など、人間関係を考慮に入れ検討を行った。その詠みぶりには、母である伊勢の影響が少なからず指摘できる。

本稿は、研究会での発表、討論において問題となった歌を中心に抜粋し、注釈を施した。また、歌の解釈に問題点が少ない歌に関しては、校訂本文と通釈のみ記した。

「中務集注釈（三）」について、ご教示を賜った皆様に深く感謝申し上げます。

各歌の文責を次に示す。一五五～一五九・一八四～一八七番（加藤）、一六〇～一六三・一八八～一九一番（斎藤）、一六四～一六八・一九四～一九七番（曾和）、一六九～一七三・一九八～二〇〇番（高野瀬）、一七四～一七七番（時田）、一七八～一八三・二〇一～二〇三番（森田）、

一 本注釈は、資経本（冷泉家時雨亭文庫編『資経本私家集二』朝日新聞社二〇〇一年所収）を底本とする。

二 本文の校合に用いた本は、以下の通り（ ）内は、異同を掲出する際の略称。

宮内庁書陵蔵本（510・12）（御）※原稿中では、御所本と称す。

西本願寺本（西）

前田家旧蔵現出光美術館蔵 伝西行筆本（前）

奈良女子大学蔵本（歌）

三 和歌本文は読解の便のため、適宜仮名を漢字に、漢字を仮名に改めた。また、詞書内には必要に応じて句読点を施している。校訂した箇所や仮名漢字表記を改めた箇所は、右にルビで底本での表記を示

した。

四 底本を校合本によって校訂した箇所は、「語釈」もしくは、「補説」に、その理由と共に明記した。

五 歌の解釈に問題点が少なく、「異同」「他出」「語釈」を記さない歌に関しては、校訂本文と「通釈」のみを記載する。

六 本注釈に類出する先行研究論文は、以下の略称を用いる。

① 稲賀敬二氏『女流歌人 中務—歌で伝記を辿る—』（新典社 平・二二）↓『女流歌人中務』

② 木船重昭氏『中務集相如集注釈』（大学堂書店 平・四）↓木船注釈

一五五番歌

七月七日

星^{ほし}まよふほどを仰^{あふ}ぎてたなばたのやすき空^{そら}なき雲^{くも}居なりけり

〔異同〕 ほとをあふきて↓ほとをあふとて（西）ほとをまつとて（前・歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○星まよふ「星まよふ」という表現は、他に見出すことができない。「雲まよひ星のあゆくと見えつるは螢のそらにとぶにぞ有りける（拾遺・物名・四〇九 すけみ）」という例を参考にすると、星が入り乱れている様子をいうのであろう。その星の中には七夕の彦星と織姫も含まれているよう。○仰ぎて 地上から空を見上げている人が主語。○たなばたの「たなばた」は、彦星と織姫の両方をさす。「七夕はいまやわかるる天河川霧立ちて千鳥なくなり（貫之・二五八）」。「の」は、連体格

で「やすき空」にかかる。○やすき空なき「空」は心地の意。天空の意をも掛け、「雲居」の縁語となる。「雨やまぬ山のあま雲たちゐにもやすき空なく君をこそ思へ（玉葉・恋一・一三三二 貫之）」。年に一度の逢瀬のために穏やかな気持ちではいられない二星の様子をいう。

〔通釈〕 七月七日

星が行ったり来たりする様子を仰ぎ見て、二星にとって穏やかな気持ちがない空なのであった。

〔補説〕 底本の「あふぎて」に従い、地上の人が、星が入り乱れている様子から、年に一度の逢瀬のために落ち着かない思いをしているであろう二星のことを思いやった歌と解した。ただし、「あふぎて」がかかる先が明瞭でない。

一五六番歌

今日^{けふ}とみな知らぬ人なきたなばたのなかさへさらに夜^よをふかすらん

〔通釈〕

逢うのは今日と、知らない人などいない織姫と彦星の間柄まで、どうしてさらに夜をふかしてから逢おうとするのだろうか。

一五七番歌

今宵^{こよひ}こそ風^{かぜ}も涼^{すず}しく天^{あま}の川^{なみ}波^{なみ}たちわたり君^{きみ}もまちけり

〔通釈〕 七月七日の今宵、風も涼しく吹いて天の川一面に波が立ち、彦

星様、あなたも立ち続けて私と同じように逢瀬を待っていたのですね。

一五八番歌

何事も思ふともなく夜もすがら寝ぬにあけぬるよをぞうらむる

〔通釈〕

あなたのこと以外何ごとも思うともなく、一晚中寝ないのにあけてしまった夜をうらみ、あなたとの仲をこそ恨めしく思います。

一五九番歌

梅を

月影の同じ色なる梅の花入るとも折りて見るべかりけり

〔通釈〕 梅を

月の光と同じ色である梅の花は、たとえ月が沈んだとしても折って見ることができる。

一六〇番歌

村上を納め奉りける陵は西の方と聞くほどに、六月に夕日焼けるして侍りけるを見やりて

移しつる西の山辺は秋待たじ涙の色に移るなるべし

〔異同〕 なし（底本・御所本のみ所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○村上を納め奉りける陵 村上天皇は康保四（九六七）年五月二五日に崩御し、村上陵は同年六月四日山城国葛野郡田邑郷北中尾（現在は京都市右京区鳴滝宇多野谷）に設けられた。○夕日焼け 〔補説〕 参照。○涙の色 紅涙。「おきつなみ あれのみまさる（中略）よらむ方なく かなしきに 涙の色の くれなゐは（以下略）（古今・雑躰・一〇〇六 伊勢）」等。

〔通釈〕 村上天皇の御遺体をお移し申し上げた御陵は都の西と聞いて、六月に西の山辺が夕焼けに染まるのを見やって

村上天皇の御遺体に移した西の山辺は秋を待たまい。帝を悼む涙の色に赤く映るはずです。

〔補説〕 「夕日焼け」という表現は他に見られない。「夕日、焼け野して」という可能性もあるが、「焼け野」は初春の風物として「若菜」「早蕨」「春日野」等と詠まれることが多く、当該歌には季節や場所がそぐわない。紅葉する季節でもないのに西の山が赤く染まる情景は、夕日によるものだと捉えた詠だろう。

一六一番歌

人の産屋の七日

千年まで君有磯海の影見れば小松も今ぞ生ひ始めける

〔異同〕 七日↓七夜（歌）、ちとせまで↓千年まつ（西）千世までも（歌）

〔他出〕 麗華・一〇七（作者中務）

〔語釈〕 ○産屋 産養。出産後三日・五日・七日・九日目の夜に行われる祝いの儀式。○有磯海 越中国、現在の富山湾を指す歌枕としても用いられるが、当該歌では普通名詞「海」として用いられており、「(千年)有る(長生きする)」を掛ける。○小松 主に子の日に引く小さな松のことを言うが、「とう中将あつとしがこうませて侍りし七日の夜／ひめ小松おほはら山のためなれば千とせはただにまかせてをみん(元輔・五二)」のように、産養や、元服・裳着の祝歌にも生い先頼もしい子の喩として多く詠まれる。

〔通釈〕 人の産養いの七日に

千年もあなた様がいらつしやる有磯海のその形を見れば、たった今小松のように生い先長いお子様もお生まれになったことです。

〔補説〕 西本願寺本の配列では、この歌の直前に、「女一宮御いかに洲浜などして奉れ給に」という詞書を持つ三首(底本一四一〜一四三番)が配されている『女流歌人中務』では、当該歌もこれに続く憲平親王誕生に際しての祝歌とされている。「有磯海」「小松」も一四一番歌同様洲浜の景によるか。

一六二番歌

ものへ行く人に鶴の型幣にして

君が行く雲路遅れぬ葦鶴は祈る心のしるべなりけり

〔異同〕 詞書ナシ(前)、ものへ行く人に↓物へ行人(歌)、型幣にして↓かたをぬさにして(西・歌)、こころの↓こころも(西)

〔他出〕 続千載・羈旅・七六三(作者中務)

〔語釈〕 ○幣 旅の安全祈願の料として紙や布を細かく切ったもの。散米などと共に幣袋に入れて携行し、峠など道祖神の前でまき散らす。転じて旅に出る人への餞別の品全般を指すようになったが、ここでは前者であろう。○葦鶴 元来葦辺に下りている鶴をいう語であるが、当該歌では「雲路遅れぬ」に続いていることから、単に鶴の異名として用いられている。

〔通釈〕 旅立つ人に鶴の型に幣を整えて

あなたが旅立ってゆく方角の空に遅れずついてゆく鶴は、あなたの無事を祈る私の心のしるべなのです。

一六三番歌

秋、ものへ行く人に

風よりも手向けに散らせ紅葉も秋の別れは君にやはあらぬ

〔通釈〕 秋に旅立つ人に

風からも、手向けとして紅葉を散らして下さい。秋の別れとは、きつとあなたとの別れのことではなかったでしょうか。

一六四・一六五番歌

讃岐にて、景明

もみぢ葉の錦に見ゆる浦々は波の綾をやたち重ぬらん

返し

色深きもみち染めける浦々は満ち来し潮の数を増しけん
いろかみそ うらく みこ しほ かす ま

〔異同〕 □□ ↓うらくは（御・西・歌）、うらくは ↓はまはくは（前）、
そめける ↓そめけん（歌）、みちこししほの ↓みちしほの（前）、か
すやましけん ↓かみやましけむ（西） かすやましけん（前）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○讃岐 現在の香川県。○景明 源景明。生没年未詳。従五位
下大蔵少輔春宮少進兼光の男。長門守、右衛門尉、従五位下に至る。廉
義公（頼忠）の家で歌をよみ、中務や兼澄との交渉がある。長門守であつ
たほか、兼澄集に「景明が筑紫へ行くに、山鳩色のをやるとて」など
からみると、地方官を歴任したようである。○浦々 底本では虫損によ
るのか判読不可能となっているため、他本により「浦々」と校訂した。
「浦」は入江。港。転じて海辺も指す。「浦々」はいくつもの浦。「裏々」
を掛ける。「浦」と「裏」を掛けた例には「白浪はたてど衣にかさなら
ず明石も須磨もをのがうらうら（拾遺・雑上・四七七 人麻呂）」など
がある。○波の綾 波紋を綾に見立てた表現。「竜田川を見て／風の織
る波の綾をや夏衣竜田川とはいひながすらん（能宣・二一六）」。○たち
重ぬらん 「たち」は波が立つ意に「錦」の縁語「裁つ」を掛ける。また、
「錦」「裏々」「綾」「たち重ぬ」は縁語。○満ち来し潮 「潮」に染料に
布を浸す回数を数える語の「入」を掛ける。「五条の内侍のかみの賀の
屏風に、松の海にひたりたる所を／海にのみひちたる松の深緑いくしほ
とかは知るべかるらん（拾遺・雑上・四五七 伊勢）」。

〔通釈〕 讃岐で景明が

紅葉の葉が錦のように見える浦々は、衣の裏々ではないが、波が立つ
て、波の綾を裁ち重ねているのでしょうか。

返し

色の深い紅葉を染めたという浦々は、満ちてきた潮が入の数を増し
たからでしょうか。

一六六番歌

大貳の下るに

老いぬれどなほ行く末ぞ祈らるる千歳までもに生の松原
を 行 すゑ の、ちとせ

〔異同〕 をいぬれと ↓おいぬとも（前・歌）、行すゑ ↓ゆくさきに（西）
ゆくさきぞ（歌）、ちとせまでも ↓ちとせまつにも（西）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○大貳 太宰府の次官。平安初期以来親王の太宰帥任官が慣例
化すると、帥は遥任のまま権帥・大貳のどちらかが事実上の長官とし
て赴任した。この大貳が誰なのかについては未詳。○老いぬれど 年を
重ねても、の意。○行く末 下向する行く先と、長寿の意を重ねる。「は
るばると雲井をさして行く舟の行末遠く思ほゆるかな（拾遺・雑賀・一
一六〇 伊勢）」○生の松原 筑前国の歌枕。「生の松原」の「生」に「行
き」を掛けて詠まれることが多い。当該歌は「生」に「生き」を掛ける
早い例か。「老い」と「生」を対照させている。「むすめの筑紫に下り侍
りしに／千歳まで生の松原いきて身を心づくしに恋ひやわたらん（伊勢
大輔・一〇四）」。

〔通釈〕 大貳が下る時に

年を重ねても、やはりあなたの行く末が祈られることです。生きの
松原と同じく千年までも生きるように。

一六七番歌

風が吹く日、物へ行く人に

風吹けば思ほゆるかな住江の岸の波にもあらぬ君さへ

〔異同〕 風ふく日ものへいく人に↓かせふくにもはいきける（西）、すみのえの↓住吉の（歌）、なみ杜にも↓なみきにも（御）あらぬ↓おいぬ（前）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○風吹けば 風が吹くと、の意。当該歌は「風吹けば思ほゆるかな住江の岸の藤波いまや咲くらむ（亭子院合・三三二 兼行王）」を本歌とする。○物へ行く「物」は目的地をはっきりといわず、漠然という場合に用いられた。「あるところ」という程の意。地方へ下る場合や寺社参詣に赴く際などに使用された。（一六九・一七〇番歌の「補説」参照）。○住江の岸 住江は摂津の歌枕。現在の大阪市住吉区。岸に「来し」を掛ける。「をとこの兄なりし人／すみよしの岸にきよする沖つ波まなくかけても思ほゆるかな（伊勢・二六〇）」。

〔通釈〕 風が吹く日、ある所へ行く人に

風が吹くと、岸の藤波が思われるという歌ではないけれど、あなたがことが間無く思い出されることです。住江の岸に寄せて来る波のように、始終訪れるわけでもないあなたであっても。

一六八番歌

又、物へ行く人に

時の間も数多たびのみ悲しきは君が行くべき道にぞありける

〔通釈〕 また、ある所へ行く人に
ほんの少しの間でも、何度となく悲しいのは、あなたが行くはずの道だったからなのだなあ。

一六九・一七〇番歌

ものへ行く人、雨降るとて留まる

泣く涙空に満てばやおしなべて今日しも雨の降りて留めつる

返し

こき混ぜて雨も雨も降りつるにいづれによりて君留まるらん

〔異同〕 ものへいく人↓ものへいくに（西）これはものへゆく人の（前）、あめふるとととまる↓あめふるとととまる人に（西）あめふれはとまるとと（前）、をしなへて↓おほそらに（西・前）、ふりてとめつる↓ふりと、めつる（西・前）、ふりつるに↓ふりつるは（前）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○ものへ行く 一六二番歌以降「ものへ行く」ことに関わる歌が続く。ここは参詣の旅か。〔補説〕参照。○泣く涙空に満てばや私

の泣く涙が空に満ちるからだろうか、の意。「人しれぬ寢覚めの涙降り満ちてさも時雨つる夜半の空かな（二条摂政・一六九）」或いは、「泣く」の主語は自分ではなく、相手か。「補説」参照。○おしなべて 一様に、あまねく、の意。「降り」にかかる。○こきまぜて かきまぜる、まぜあわせる意。

〔通釈〕 旅立つ人が、雨が降るということで留まる

別れを悲しんで泣く涙が空に満ちるからだろうか。あまねく、旅立つ今日という日に、雨が降って私を留めてしまったことですよ。

返歌

混ぜ合わせて涙も雨も降ってしまったのに、どちらによつて、あな

たは留まっているのでしょうか。
〔補説〕「ものへ行く」は、平安前期頃には旅立ち一般を指して使われ、旅立ちに際して餞別を贈る歌に例が多い。それが、十一世紀を迎える頃から寺社に参詣する程度のことを指すケースが増えて、平安後期以降は、概ね「物詣」の意味で使用されている。

当該歌では、地方へ下る長旅を言うのか、それとも物詣でなのか、詞書からは判然としない。しかし、贈答の趣旨からは、それほど切実な別れの場でもないように感じられるので、或いは物詣でに立つ折の贈答かと思われる。

雨が降る日の送別の歌として、次のような先行歌があった。

兼茂朝臣ものへいくに、兼輔朝臣餞するに、雨ふる日

久方の雨も心になはなむふるとて人の立ちとまるべく

（貫之・七二六）

旅立ちの日の雨は、送る人が旅立つ人との別れを惜しみ悲しむ涙雨のイメージであり、当該歌はこうした歌を背景にした贈答なのであろう。

「泣く」のは「私」と考えたが、「あなた」とも解釈できる。その場合、贈歌は「あなたが私との別れを惜しんで泣く涙が空に満ちたからでしょうか、今日という日に雨が降って私を引き留めてしまったことですよ」の意となるが、一首の中で主語を転換させる必然性は弱いのではない。『清少納言集』には、次のような参詣に赴く人との遣り取りがある。

住吉にまうづとて、いととく帰りなむ、その程に忘れたまふな
といふに

いづかたにしげりまさると忘れ草よしすみよしとながらへてみよ

（清少納言・一二）

当該一七〇番歌も、この歌に似た雰囲気がある。「あなたと別れて旅立つのは辛い」という相手に、「涙のせいで留まったなんてあやしいものだ」と返したのではないか。そう考えると、物詣での旅という印象も一段と強まってくる。

一七一 番歌

越路へ行く人に

白山しろはの雪ゆきのなごりは寒かたみくとも形見かぜの風はあふぎつつみよ

〔異同〕 こしちへゆく人に↓こしちへいくひとにあふぎやるとて（西・前、みよ↓ふけ（西）、前田家本は下句を欠く。

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○越路 北陸道。現在の北陸地方のほぼ全域を言う。「白山」も共に詠まれることが多い。「きえはつる時しなればこしちなる白山の名は雪にぞありける（古今・羈旅・四一四 躬恒）」○寒くとも 底

本は「さむく」に虫損あり、他本により補う。○形見の風 底本詞書には「扇」云々は無いが、他本により扇を贈る際の歌と知られる。「田舎へ下る女に、ある女の、扇をさまざまにして、形見にせよとてなどいひおこせたりければ／形見といふ扇の風はわくらばに夏ばかりこそ思ひいでられめ（嘉言・五一）」。「補説」参照。

〔通釈〕 越路へ行く人に

白山の雪のなごりは寒いとしても、形見の風は、この扇をあおぎあおぎしてみて下さい。

〔補説〕 「形見の風」、或いは「風を形見とする」類の表現は、「語釈」に挙げた『嘉言集』の例を除くと、平安時代では他に見当たらない。鎌倉時代には、「風を秋の形見とみる」ような表現も見られるものの、基本的に風は形見そのものになることは少ない。ただ、先行歌として、『古今集』等に採られた貫之歌に、陸奥へ下る人に装束を贈る際に添えられた歌「玉鉾の道の山風寒からばかたみがてらにきなんとぞ思ふ（貫之・七五〇）」は、「寒し」「風」「形見」が当該歌と共通する。

一七二・一七三番歌

親の伊勢が歌、召しありて内裏に奉りし奥に

時雨つつふりにしあとの言の葉はかき集むれど留まらざりけり

御返し

昔より名高き宿の言の葉はこのもとにこそ落ち積もるらめ

〔異同〕 なし（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 拾遺抄・雑上・四二三～四、拾遺・雑秋・一一四一～二、村上御集・一二二～三

〔語釈〕 ○内裏に奉りし奥に 天皇に献上した歌の草子の最後に、の意。草子や歌集の最後に歌を書き付ける例は多い。○ふりにしあと「ふり」は「降り」と「旧り」の掛詞。「嵯峨の山みゆきたえにし芹河の千世のふるみちあとと有りけり（後撰・恋六・一〇七五 在原行平）」。「補説」参照。○このもと「木の下」と「子の許」の掛詞。「打ちはへて亡きこのもとは君がとふことのは見るにまづぞ悲しき（元輔・八八）」。

〔通釈〕 親の伊勢の歌を、お召しがあつて天皇に献上した奥に

時雨が繰り返して降った後の木の葉を掻き集めてもなかなか留まらないうちに、時を経た後の母の歌をすべてを記すことは難しいことです。

御返事

昔から歌人として名の高い宿の言の葉は、木の下、子の許にこそ落ち積もっているであろうよ。

〔補説〕 『拾遺抄』『拾遺集』及び『村上御集』では、一七二番歌の第二句は「ふりにしやどの」とする。この形だと、返歌の「名高き宿」との対比が明瞭になり、「ふりにし宿」に謙遜の気持ちを感じとれることも出来るだろう。「時雨が降り散らした亡母の歌は、十分に集められませんでした」という中務に、「それでも子の許にこそ多く積もっているのだから、これでよいのだ」と御返歌があった。

底本「ふりにしあとの」でも、主旨は変わらない。ただ、「時雨つつふりにしあと」とした場合、時雨が繰り返して降った後に間断なく散り落ちる木の葉のさまと、その葉を掻き集めることの困難さが鮮明にな

る。加えて伊勢の死後の時間の経過と、母の死を悲しみつつ日を送った中務の実感も深く込められるように思う。時雨に涙を重ねる歌は多いからである。その意味では、「やど」よりも「あと」のほうが表現として勝れているとも考えられるが、逆に、返歌で「宿」が言われる必然性は薄くなる。ここでは底本に従った。

一七四番歌

円融院の仰せ言にて古歌奉りしに

いまさらに老いの袂に春日野の人わらへなるわかな摘むかな

〔異同〕 円融院の仰せ言にてふるうたてまつりしに↓朱雀院の御時うためすにたてまつる（西）、すさくみんの御ときうたてまつる（前）、すさく院の御時のわかかなめす（歌）、ひとわらはへなる↓ひとわらへなる（御・西・歌）、ひとわかななる（前）

〔他出〕 円融院御集・一

〔語釈〕 ○円融院 天徳三（九五九）年→正暦二（九九一）年。在位期間は、安和二（九六九）年→永観二（九八四）年。○春日野 大和国の歌枕。早春のイメージで捉えられ、中古以降、若菜とともに詠まれることが多い。「かすがのにおふるわかかなを見てしより心をつねに思ひやるかな（後撰・春上・一三 躬恒）」など。○人わらへ 底本の「人わらはへ」でも意は汲めるが、文法的に問題がある。また、字余りになってしまうこと、「人わらはへ」という他例も見あたらないことなどから、他本により校訂した。○若菜摘む 「若菜」は「我が名」、「摘む」は「積む」をそれぞれ掛けている。「春の野の若菜ならねど君がため年の数を

もつまんとぞ思ふ（拾遺・賀・二八五 伊勢）。当該歌は、老いた自分が若菜を摘む（若さを求める）ことが、「人わらへ」なことだという認識で詠まれている。当該歌で中務が「若菜」と「我が名」を重ねて謙遜したのに呼応し、次の一七五番歌でも、「わかな」に中務の評判という意味を持たせ、その劣らぬ評判を賞している。

〔通釈〕 円融院のご命令で、昔詠んだ歌を差し上げたときに

今になって、老いた袂に春日野の若菜を摘むように、人に笑われるような我が歌の評判を積むことよ。

〔補説〕 当該歌の詞書にある「円融院」は、他本の詞書ではすべて「朱雀院」の御時となっている。しかし、当該歌から始まる三首が『円融院御集』に収載されていることからすると、円融院の召しに応じたものであると考えてよいだろう。木船注釈では「朱雀院の御時」とあるのは誤りであるとされている。対して稲賀敬二氏は、「花山天皇に對して円融院を前の天皇という扱いで『朱雀院の御時』と表現したのである」と考察されている（『女流歌人中務』）。しかし、円融院を指して「朱雀院」と称する例も確認できる。例えば『大齋院前御集』四四番歌詞書に「二月十三日、紫野にて朱雀院の御子日させ給ふに」とあり、この「朱雀院」は円融院を指している。この点について、石井文夫、杉谷寿郎両氏編著『大齋院前の御集注釈』（貴重本刊行会 平十四）では、朱雀院が上皇の御所となるが多かったなどの理由により、円融院を朱雀院と称したものと解されている。

一七五番歌

これを後のちにごらんじて、又の年の七日としに銀しろがねの籠こに若菜わか菜などして、孫むすこの少将しょうしょうを御使みづかひにて

春日野かすがのに多くおほの年はつみつれど老おいせぬものはわかななりけり

〔異同〕 詞書↓御覽してひけこにわかないれて少将をつかひにてたまつる(西)、こらんしてひきくにわかないれて正月七日少将をつかひにて(前)、御賀して正月七日ひけこにわかないれて少将御つかひにてたまつる(歌)

〔他出〕 拾遺・春上・二〇、拾遺抄・三七六、玄々・一、新撰朗詠・三一、円融院御集・二、古来風体抄・三四五、五代集歌枕・六八二、歌枕名寄・一七五五

〔語釈〕 ○これをのちにごらんじて「わかな」を詠み込む一七四番歌の歌意に呼応する、正月七日の若菜に事寄せて、贈り物を仕立てて返歌をしたものと思われる。○孫の少将 藤原光昭。中務の娘・井殿の子。天曆中頃に生まれ、従四位下右少将に至る。

〔通釈〕 これを後に御覧になって、翌年の正月七日に、銀の籠に若菜などをに入れて、孫の少将をお使いとして

春日野で多くの年は積み重ねたけれど、老いしないものは若菜、すなわちあなたの評判なのです。

〔補説〕 「孫の少将」を使いにして中務に贈ったとあることから、光昭が少将である貞元三(九七八)年以降、卒去した天元五(九八二)年以前の歌と考えられ、これは円融院の在位中のこととなる。稲賀敬二氏(『女

流歌人中務』)は、『能宣集』冒頭の詞書に「円融太上天皇の在位の末に勅ありて家集を召す。今上花山聖代、また勅ありて同じき集を召す」とあることを指摘され、中務の一七四番歌が献上された事情もこれと関連づけて考えられている。すなわち、「在位の末」は光昭が少将であった期間に限定できると考えておられるのである。稲賀氏の説が正鵠を得ており、かつ一七五番歌の詞書を信じるならば、一七四番歌の詠作は、天元四(九八一)年以前であり、その翌年の贈答(二七五・一七六番歌)を収める現存『中務集』の成立は、同五年以降のことと考えられる。

一七六番歌

御返し

年としつめど同じおなさまなるわかなにも今日けふには似にずやあらんとすらん

〔異同〕 御返し↓御返事(西)、おほんかへりこと(前)、けふには↓けふたに(西・前)、けふた、(歌)、にすや↓こすや(歌)

〔他出〕 円融院御集・三

〔語釈〕 ○あらんとすらん「あらん」は、そうならうとする意志を示し、「すらん」は推量を示す。「野辺に出でて暮るるを待つに今日なればねのびや長くあらんとすらん(大斎院前・三四)」。

〔通釈〕 御返し

長い時間を積み重ねても同じ姿の若菜でも、今日だけはいつもの姿でなくすばらしいものであろうとするのでしょうか。

一七七番歌

又、海松を給はせたるに

海にのみ生いたる松の深緑いくしほとこそ限らざりけれ

〔異同〕 なし（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○海松 みる。鮮やかな緑色の海藻。「見る目」を掛けた恋歌として詠まれる例が多いが、ここでは、『土佐日記』正月二十九日に「おぼつかなかふはねのびかあまならばうみまつをしぞひくべかりける（貫之）」とあるごとく、子日の小松引きと海松をつなげ、贈り物とされたものと考えられる。「うごきなさいはほにねさすうみまつのちとせはたれになみもよすらむ（恵慶・一四七）」などは、海松に賀意をもたせた例である。○いくしほ 「しほ」に「潮」と染める回数「入（しほ）」を掛けた表現。

〔通釈〕 又、海松を下さったので

海にだけ生えている松の深緑は、幾度染めたと限ることができないほど深いことよ。

〔補説〕 当該歌は、一七四～一七六番までの歌とつながっていると考えることもできる。ただし、当該歌のみが底本・御所本のみの所収歌であることや、伊勢にこれと類似した歌があることに問題が残る。「五条の尚侍の賀の屏風に、松の海にひたりたるところを／海にのみひちたる松の深緑いくしほとかは知るべかるらん（拾遺・雜上・四五七 伊勢）」秋間康夫氏は、これを伊勢歌の混入として、「中務の死後、子孫の誰か

が整理されずに残されていた詠草を、円融院に献上した自撰中務集を中心にして編纂したのが御所本なのではあるまいか」とされている（『中務集の性格』『同朋大学論叢』四四・四五巻 昭五六・六）。他方、加藤雄一氏は当該歌を、母・伊勢の詠法を継承したものととらえられている（『伊勢から中務へ―詠法の継承』『大阪大学語文』八八 平十九・六）。今回は、詠作状況を鑑み、母・伊勢の歌に影響を受けた中務の詠と解した。

一七八・一七九番歌

中宮の御草子書かせ給ふおくに、「玉笹の葉分けに宿る露ばかり」とあることを書きてまゐらせたれば、御覧じて宮より見れどなを野辺に枯れせぬ玉笹の葉分けの露はいつも絶えせじ

御返し

消えぬ間をうきことにする玉笹の露は風待つほどぞ久しき

〔異同〕 給おくに↓給ひけるに（西） 給けるおくに（歌）、たまさ、宮より↓ナシ（前）、つゆはかり↓ナシ（歌）、ことをうたを（西）、まゐらせたれば↓まいらせたりければ（西）、御覧して↓ナシ（歌）、みれとなほ↓みれはなを（西）、たまさ、の↓たまさ、は（前）、はわけの↓は、きの（西）、はわけのつゆはいつもたえせし↓はたの、つゆはいつもかれせし（前）

〔他出〕 続古今・雜下・一七八（一七八のみ）、一七九番歌は他出なし
〔語釈〕 ○中宮 藤原安子。○奥 書物や手紙の最後。○玉笹の葉分け

一八〇番歌

故伊勢が歌書きて人に奉りし奥に

なき人の言の葉うつす水茎はかきもやられず袖ぞ濡れける

〔異同〕 詞書↓後撰の歌ともかきに人につかはすに（西）こいせのこかうたかきてとひとつかはす（前）こせいの歌かきて人につかはすに（歌）、うつす↓かへす（西）うつる（前）、かきもやられす↓かきもやられて（西）、ぬれける↓ぬれぬる（西）

〔他出〕 新勅撰・雑三・一二二二

〔語釈〕 ○故伊勢が歌書きて 底本の詞書「恋せる歌書きて」では、歌の内容と合致しない。元々「故伊勢が（こいせが）」とあったものの誤写と判断し、校訂した。詳しくは「補説」。○人に奉りし 献上先の「人」が誰であるのかは不明。一七二・一七三番歌の、村上天皇への『伊勢集』献上とは別の時期のことか。○なき人の言の葉うつす水茎は 水茎は、筆跡・筆の意。当該歌は、伊勢が勤子内親王の死を悼んで詠んだ「なき人の書きとどめける水茎はうちみるよりぞ悲しかりける（伊勢・四五二）」に影響を受けた詠と思われる。○かきもやられず「かく」は「書く」に、水茎を「掻く」の意を響かせる。「書きやる」は、「書き送る」、又は「すらすらと書き続ける」と解せるが、当該歌は「奉りし奥」に書かれた歌であることから、後者で解釈した。

〔通釈〕 故伊勢の歌を書いて、人に奉った奥に、

亡き人の言葉を書き筆は、すらすらと書き続けることもできず、涙で袖が濡れてしまったことです。

に宿る露ばかり「玉笹の葉わきにおける白露の今幾代経ん我ならなくに（古今六帖・三九五〇）」を踏まえたものと思われる。「葉分け」は、光や霜が葉と葉の間を分けること。『源氏物語』藤袴巻において、蛭宮が玉鬘へ贈った歌「朝日さす光を見ても玉笹の葉分けの霜を消たずもあらなむ」は、同じ古今六帖歌と、『拾遺集』所収の「わが駒は早く行かなん朝日子がやへさす岡の玉笹の上に（拾遺・神楽歌・五八四）」を撰取した詠。この蛭宮歌において、「葉分けの露」が「霜」に置き換わっていることに象徴されるが、「笹」は「露」よりも「霜」とともに詠まれる例が多い。「笹の葉に置く霜よりも一人寝るわが衣手はさえまさりける（古今・恋一・五六三 友則）」など。

〔通釈〕 中宮が御草子をお書かせなさった奥に、「玉笹の葉分けに宿る露ばかり」とあることを書いて差し上げたところ、御覧になつて、宮から、

（儂い露の歌を受け取ったので）見てみましたが、猶、野辺で枯れていない玉笹の、葉と葉の間を分ける露は、常に絶えはしません。

御返し

消えない間を辛いことと思う玉笹の露にとつては、散らしてくれる風を待つ間こそが長いのです。

〔補説〕 当該贈答のきつかけとなった、中務が奥に記した「玉笹の葉分けに宿る露ばかり」とは、中宮に奉った草子を、「葉分けの露のごとく、早々に消え去ってほしいような拙い草子です」と謙遜したものであらう。これを受けて中宮は、「玉笹の露」に仮託し中務を立てるが、返歌で更に中務は、「露が消えない間が辛い」すなわち、「このような拙いものが人目に触れている間が辛いのです」と、謙遜を重ねるのである。

〔補説〕「語釈」に記した通り、底本の詞書「恋せる歌かきて人に奉りし奥に」のままでは、恋愛にまつたく関わらない当該歌の内容とかけ離れている。他本の詞書もまた、「後撰の歌ども（西）」「こせいのうた（歌）」と、いずれも採り難いものである。前田家本の、「こいせのこがうたかきて（故伊勢の子が歌書きて）」も、このまま採用することはためられる。

他出である『新勅撰集』の詞書、「伊勢集をかきて」を手掛りに考えると、おそらく底本は、元々「こいせが（故伊勢が）」又は、「こいせの（故伊勢の）」などとあったものが、伝写過程で「こいせる」と誤写され、さらに漢字があてられて、「恋せる」となった可能性が高いと思われる。他本も「こいせ（故伊勢）」の部分の誤写によって、それぞれの本文に至ったものと考えるのが穏当だろう。よって、「故伊勢が」と校訂した。

一八一 番歌

宮の御方に人の遊ぶを見て

思ひ出でて昔の事をしらすは絶えにし琴の音にぞありける

〔異同〕 なし（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○宮の御方 『中務集』中、「宮」と称される人物として、藤原安子や藤原皇子、資子内親王他数名が確認できるが、当該歌の「宮」が具体的に誰を指すのかは明らかでない。○事 当該歌は、「昔のこと」「琴の音」と、「事」と「琴」が響き合う。このような表現の類例は、先行・同時代には見出し難いが、『散木奇歌集』に、以下の掛詞例が確認で

きる。「大殿歌絵の中に、秋の野に男箏を前に置きて刈萱を刈りたる所に、にといふものを二置くを詠める／とにかくに乱れて見ゆる刈萱は物思ふことのしるしなりけり（散木奇歌・三九五）」○絶えにし琴「補説」参照。

〔通釈〕 宮の居所で人が管絃を奏しているのを見て、

思い出して、かの伯牙絶絃の故事について知らせるのは、もう弾き止んだ琴の音であつたよ。

〔補説〕「絶えにし琴の音」とは、弾き止んだ琴の音の意。類例に、「絶えにけるはつかなる音を繰り返し葛の緒こそ聞かまほしけれ（能宣・四二八／後拾遺・雑五・一一四九）」がある。『後拾遺集』所収の能宣歌に對し、『和歌童蒙抄』は、『蒙求』の「伯牙絶絃」の故事の影響を指摘する。同話は、琴の名手・伯牙と、その友人・鍾子期を語ったもの。自分の音楽をよく理解してくれた鍾子期の死後、伯牙は琴を弾くことをやめてしまったという。

当該歌の、「絶えにし琴」もまた、伯牙の故事「絶絃」を摂取したもののか。詠作状況が明らかではない当該歌だが、「絶えてしまった琴の音が、かの故事を思い起させる」と詠んだものと考えれば、やや漠然とした当該歌の内容が、明瞭になるだろう。

一八二・一八三 番歌

秋はまだしき頃、檀の紅葉を見て孫の大納言君、

時雨をば待ちもつけてや山の端の檀の紅葉まだき染むらん

返し。法師となん。

時かねて移ろふ枝のあたりには人に知られぬ秋やきぬらん

〔通釈〕 秋にはまだ早い頃、檀の紅葉を見て孫の大納言君が、

時雨を待ちかねて、山の端の檀の紅葉は早くも色を染めたのでしょうか。

返し。法師の歌だということだ。

時季になる前に、色移ろった枝がある辺りでは、人に知られていない秋が来たのだろうか。

一八四番歌

門さして、和泉守順朝臣、垣をへだててある所、こなたの人な
ん垣を越えて梅とりたるとなん言ふと聞きて、梅をやりたれ
ば、順がいひおこせたる

ぬせきにもさはらず水のもる時はまへのむめづも残らざりけり

〔異同〕 順朝臣↓したかふのあそふ（歌）、へたて、ある所↓へたて、あるに（西・歌）へたて、あるを（前）、こなたの人なんかきをこえて梅とりたるとなんいふと↓梅をこなたの人みなとりたりといふに（西）むめをこなたの人のいりてとりたるといふを（前）物をこなたの人のいりてとりたりといふを（歌）、順かいひをこせたる↓したかふ（西・前・歌）さはらず↓さわらて（前）、みつの↓むめを（西）、もるときは↓をるときは（西）、松のむめつも↓まへのぬせきも（西）まへのむめにも（前）まへのむめさへ（歌）、のこらざりけり↓さはらずざりけり（西）

〔他出〕 順・二五〇

〔語釈〕 ○和泉守順朝臣 『歌仙伝』によると、源順が和泉守に任ぜられたのは康保四（九六七）年。○こなたの人 中務側の人。○ぬせき

川の水をせき止めた所。「ぬせきよりもる水のおとのきこえぬは冬きにければこほりすらしも（好忠・五四九）。○もる 水が「漏る」意と、梅の実を「挽る」意とを掛ける。「挽る」の例として「我が門の榎の実もり食む百ち鳥千鳥は来れど君そ来まさぬ（万葉・卷十六・三八七二）」がある。○まへ 底本では「松」だが、「へ」を「つ」と誤写した可能性が強く、他本により「まへ」と訂した。○むめづ 梅津川。山城国の歌枕。桂川の一部。その名から「梅」を連想して詠まれた。「心うしと思ふ人のもとに、梅をおこせたらば／梅津川井せきの水ももる中となりける身をまづぞうらむる（和泉式部・七三七）」。当該歌でも「梅」を連想させて詠まれている。

〔通釈〕 門を閉ざして、和泉守順朝臣が、垣を隔てて住んでいる所で、こちらの人が垣根を越えて梅を盗ったと言っていると聞いて、梅を（順の家に）送ったところ、順が言ってきた歌

井堰にも妨げられず水が漏れる時は、前の梅津川の水も残らなかつた。垣根があるにもかかわらず、あなたの方が梅をもぎ取ったので梅は一つも残りませんでした。

〔補説〕 当該歌は、『拾遺集』の「名のみしてなれるも見えず梅津河ぬせきの水ももればなりけり（雑下・五四八 よみ人しらず）」をふまえ、垣根に隔てられているにもかかわらず、あなたの方が梅を挽ぎ取ったので、私の家の前の梅は全く残らなかつた、と中務側を軽く咎めている歌。

一八五番歌

返し

いづみだにとまらずいかにもりにけん堰せきの古杭ふるひくひもありしを

〔異同〕 いづみだに↓ゐせきにも（西）いつみにも（前・歌）、とまらずいかに↓さはらていかて（西・歌）さはらすいかに（前）、もりにけん↓もりつらん（歌）、せきのふるくひ↓すきのふる恋（歌）、くひもありしを↓くひもあかぬに（西）ひまもあらぬに（前）こひもあへぬに（歌）

〔他出〕 順・二五一

〔語釈〕 ○いづみ 地中からわき出る「泉」の意に、順が「和泉守」であることを響かせる。「円融院御時御屏風歌たてまつりけるついでにそへてたてまつりける／ほどもなくいづみばかりに沈む身はいかなる罪のふかきなるらん（拾遺・雑上・四四四 順）」。当該歌では、いづみの「み」に梅の「実」を掛ける。○だに 軽いものをあげ重いものを類推させる。ここは水量の多い川の水ならともかく、水量が少ない泉さえもこの意。○もりにけん 一八四番歌と同様に「漏る」と「挽る」を掛ける。○古杭 川の水をせき止めるための井堰の杭が古くなったもの。「おほ井川せきのふるくひとしふともわれ忘れんと思ひけんやは（古今和歌六帖・二八六六）」「中納言国信家歌合に、恋の心をよめる／人ごころなにをたのみてみなせ川せきの古杭くちはてぬらん（千載・恋五・九一五 藤原基俊）」。

〔通釈〕 返し

川の水ならともかく、わき水でさえとどまらずにどのようなにして漏

れたのでしょうか。井堰の古杭の杭もありましたのに。垣根があるのに梅の実をどのようにして残らずもぎ取ったのでしょうか。

〔補説〕 順が「梅津川の水も残らなかった」と言ったのに対し、古いとはいえせき止める杭があつたのに、わき水でさえも残らなかったのはどういうことなのでしょうかと、順が和泉守であることを「泉」にひびかせて詠んだ。垣根があるにもかかわらず、梅の実がすべてなくなるとはどういうことなのでしょうかと、こちらでは梅の実を挽ぎ取っていません。言いがかりではないですか、と切り返している。底本に従って解釈したが「堰の古杭くひもありしを」は意味が取りにくい。『順集』の本文「くちもあえぬに」だと古杭は腐りきっていないのに、という意になり理解しやすい。

一八六番歌

又返し、給ふ

いづみにもあらぬ籬まがきのしまちか近み波なみの越えつ、もるとこそ聞きけ

〔異同〕 又返し、給↓またしたかふ（西・前・歌）、いつみにも↓いつみには（西）いつみかは（前）、□まちかみ↓しまちかみ（西・前・歌）、なみのこえつ、↓なみの（前）

〔他出〕 順・二五二

〔語釈〕 ○又返し給ふ 一八四番歌の詞書には順への敬意を表す表現はなかった。他本は「またしたかふ」となっており、誤写の可能性も想定される。○籬のしま 底本では一字分の空白があるが、他本により「し」を補った。籬の島は、陸奥国の歌枕。人を隔てる垣根の意を含む

で詠まれる。「さだくにの朝臣のみやす所、きよかげの朝臣と、みちのくににある所をつくして歌によみかはして、いまはよむべき所なしといひければ／さても猶まがきの島の有りければたちよりぬべくおもほゆるかな（後撰・恋二・六六六 源清蔭）」など。○もる 先の贈答と同様に、「もる」に「漏る」と「挽る」を掛ける。

〔通釈〕 又、返しをなさる

和泉ではない籬の島が近いので、波が越えては漏ると聞いていますよ。垣根があるにもかかわらず、それを何度も越えて梅の実をもぎ取ったと聞いていますよ。

〔補説〕 和泉から陸奥の籬の島に転じて、籬の島を波が越えるように、あなたの家の人が垣根を越えて梅の実をもいでいくと聞いていますよと詠んだ。妹尾好信氏は「籬の島」は陸奥国の歌枕であり、両家の間の中垣をさすとともに、中務の夫信明が陸奥守であったことをもさしている。（一八七番歌〔補説〕参照）と指摘されている。

一八七番歌

返し

うち越えん波のおとせばもらぬよりしまきの風ぞ吹き返さまし

〔異同〕 返し↓またかへし（西・前）、うちこえん↓うちこゆる（西・歌）うちこふる（前）、もらぬより↓こゆるより（歌）、しまちの風ぞ↓しまきのかせそ（西・前）しまさきの風ぞ（歌）、ふきかへさまし↓ふきかへさる、（西・前・歌）

〔他出〕 順・二五三

〔語釈〕 ○もらぬ 「漏らぬ」と「挽らぬ」を掛ける。○しまきの風 底本では「しまちの風」だが、他本によって訂した。「しまき」は風が激しく吹き荒れること。強風。「し」は「風」の古語で「あらし」や「つむじ」の「し」も同じ。「しまき」の例は、少し時代が下るが、次の歌に見える。「せとわたるたななしをぶねこころせよあられみだるるしまきよこぎる（山家・五四四）」。○吹き返さまし 「吹き返す」は、風が吹いてもとの場所に戻す意。「さ夜ふけてなかなばたけゆく久方の月ふきかへせ秋の山風（古今・物名・四五二 かげのりのおほきみ）」。

〔通釈〕 返し

もし籬の島を越える波の音がしたならば、水が漏れないうちから強風が吹き返したことでしよう。こちらの者が垣根を越える音がしたならば、梅の実をもぎ取らないうちにそちら側が気がついて追い返したことでしよう。

〔補説〕 垣根を越える時には音がするはず、その音にそちらが気がついて、梅を挽ぎ取る前に、追い返されたはずですよと潔白を主張した。

『中務集』の歌仙家集本は当該歌に続き、他本にない次の一首を持つ。

また人

花をこそ人やおるととがめしか数ならぬ身をいかにかはせん（一九七）

この歌は、『順集』にも次のようにある。

又、北の返事

花をこそ人やをととがめしか数ならぬ身は何にかはせん（二五四）

歌仙家集本以外の『中務集』の祖本に、もともとあった歌が伝来の過程で脱落したのか、あるいは歌仙家集本が『順集』から補ったのかはさ

だかではない。

なお、この贈答歌群については、白田甚五郎氏「中務」（『平安歌人研究』所収 昭五一・七 三弥井書店）、稲賀敬二氏「王朝物語の制作工房―中務の住む町―」（『古代文化』四五号 平五・五）、同氏『三十六歌仙の女性 中務』（日本の作家6 平十一・四 新典社）、妹尾好信氏『中務集』梅の実盗難事件歌群の解釈」（『古代中世国文学』二四卷 平二〇・三 笠間書院）等の御論考があり解釈が分かれているが、ここでは諸氏の説を参考にしながら資経本の本文になるべく忠実に解釈するように努めた。

一八八番歌

光昭の少将に

小高くて雨も障らぬ三笠山蔭に隠れぬ人はあらじな

〔異同〕 少将に↓少将（前）、あらしな↓あらしを（西・歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○みつあきらの少将 藤原光昭。一七五番歌既出。○雨も障らぬ 雨が降っても支障がない。「時すぎばさなへもいたくおいぬべし雨にも田子はさはらざりけり（貫之・一四九）」など。○三笠山 若草山の南に位置する。山名は天皇等高貴な人にさしかける天蓋の意であったことから、天子を警護する「近衛府」の異名として「柏木の森だにしげく聞くものをなどか三笠の山のかひなき（道綱母・二〇）」などと詠まれるようになった。当該歌では近衛少将である光昭を指す。また、「君がさす三笠の山の紅葉葉の色神無月時雨の雨の染めるなりけり（古今・

雑体・一〇一〇 貫之）」のように、笠（傘）の縁語として「雨」「さす」を詠む。○蔭に隠れぬ 「さく花のしたにかくるる人をおほみありしにまさるふぢのかげかも（業平・三三）」同様、「隠る」は庇護下に入る意。「世中を おもへばくるし（中略）よにあはば こだかきかげに あふがれむ ものどこそみれ（以下略）（能宣・四四七）」のように、時流に乗っている者を「小高き蔭」として頼みにするという発想。

〔通釈〕 光昭の少将に

小高くて雨に降られても障らない三笠山のように、天皇をお守りする近衛府の恩恵にあずからない人はいませんよ。

〔補説〕 山口博氏（『平安時代史辞典』）は当該歌を、光昭少将就任時を祝う歌と指摘されている。稲賀敬二氏（『女流歌人中務』）は一八四―一八七番歌の梅の実をめぐるやりとりの中で詠まれた『順集』の「花をこそ人やもるととがめしか数ならぬみは何にかはせむ（順・一〇七）」を受けて、中務が光昭に順の引き立てを要請した歌と解されている。

一八九・一九〇・一九一番歌

景明の紅梅を折りて

常にかくうち見て過ぐす我が宿の梅にや懲りずのちにまた見む

返し

立ち出でぬる春とぞ聞きし春霞かく咲く梅に遅るべしやは

又誰ならむ

思ふどちまとゐて居れば梅の花心に似てや深く見ゆらん

〔異同〕 景明の紅梅を折りて↓おなしとてかへあきらこうはひを

をりて(前・歌)、おなしとてかへらけとりて(西)、常にかく↓
つねかく(前)、うち見て↓うらみて(西・前・歌)、我が宿の↓はるな
れと(西・前)はるなれは(歌)、梅にや↓梅には(歌)、懲りす↓あか
す(前)、のちにまた見む↓のちもまたれん(西・前・歌)、返し↓ナシ
(前)、立ち出てぬる↓たちてぬる(西・歌)まちてぬる(前)、かくさ
く↓かくまで(歌)、さく↓さむ(前)、遅るへし↓をとらまし(前)、
誰ならむ↓たれにかあらん(前・歌)、をれは↓みれは(歌)、心に似て
↓こころにくく(西)こころにいる(前)、みゆ↓なる(西・前)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○かげあきら 源景明。一六四番歌既出。○梅にや懲りず

「梅に懲る」とは、「この中宮東宮の女御ときこえさせける時、だいたま
はせてよませたまひける御屏風の歌、男のゆきあひつつ物いひける絵な
むありける梅の花のたよりに物いひそめたる女に、男／みし人にまたも
や逢ふと梅の花咲きしあたりにゆかぬひぞなき(伊勢・三四)」を受け
ての伊勢の答歌、「ひとたびに懲りにし梅の花なれば散りぬと聞けどま
たも見なく(同・三五)」を意識した表現か。○立ち出でぬる春「立
春」と「春霞が立つ」を響かせる。○思ふどちまとゐて居れば 親しい
者同士車座に座っている様。○心に似てや深く見ゆらん「心深し」は、
「思いやり深い」「風情がある」の意があり、ここでは歌を梅をめぐって
歌を贈答し合う人々の互いを思ふ心と、紅梅の深い色の雅趣を「似る」
としている。

〔通釈〕 景明が紅梅を折って

いつもこのように眺めて過ごす私の家の梅に懲りず後日また見ま
しょうか。

返し

立ち出でる春と聞いた春霞がこのように咲く梅に遅れるはすがある
でしょうか。

又誰であろうか

親しい者同士で車座に座っていると梅の花も心に似て色深く見える
だろうか。

〔補説〕 一八九番歌詞書は前田家本、歌仙家集本では「同じ所にて景明
紅梅を折りて」、西本願寺本「同じ所にてかはらけとりて」とあり、い
ずれも一八八番歌と同じ宴席で連続して詠まれたものとする。稲賀敬二
氏(『女流歌人中務』)は、こちらの本文に着目され、当該三首は、一八
七番歌「補説」に挙げた、『順集』の詠に続いて詠まれた三首であり、
梅花の実景を詠んだものではなく、光昭の栄達を咲き誇る梅に例えた歌
群と解しておられる。

しかし、底本の一八九番歌詞書及び歌の「我が宿の」という表現を尊
重するならば、当該三首を一八八番からの連作と捉えずに、特段に立身
出世や政治的な含みのない、初春に景明邸の紅梅を愛でた三首と見るこ
とも可能である。少なくとも、「雨」や「三笠山」を詠む一八八番歌と、
梅を媒介として交わされる当該三首の詠みぶりには共通点が乏しい。

確かに、一九〇番歌には、やや唐突に「春霞」が持ち出され、前述の
順詠や一八八番歌との連作とみるならば、「立ち出でぬる」という表現
は、中務から景明へ、「あなたが世に立ち出でるのももうすぐですよ」
などと励ました歌のようにも読める。しかし今回は、立身出世や政治的
要素が看取しにくい一八九・一九一番歌と、前の一八八番歌との連作性
を記さない底本詞書を尊重し、三首を叙景歌として解釈した。

一九二・一九三番歌

孫の光昭むまじの少将みつあきらの家にて、二月十日あまりの月のいみじく明
かく侍けるに

春の夜のまとゐながらもながらへんと思ふ心も命絶えずは

返し

この春をはるのぶる心こころのはじめより千代ちよ過すぐるまで思ふおもやは君きみ

〔異同〕 むまこのみつあきらの：侍けるに↓おなし少将二月十よ日のよ
のつきのあかきに少将（西）おなし少将二月十五日に月のあかきに少将
（歌）おなし少将い多にゐて二月十日月あかきに（前）、まとゐ↓よひゐ
（西・歌）よゐ、（前）、なからへんと↓なからへん（御）なからへむ
（西）、返し↓返事（西・歌）、はしめより↓はしめまで（西）はしめに
て（歌）、ちよ↓ちとせ（前）、すくるまで↓ふるまでは（西）ふるまで

（歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○孫の光昭の少将 藤原光昭。一七五番既出。○まとゐ 団欒。

○ながらも 次の語句「ながらへんと」を導く序詞的表現。○ながらへ
んと 底本「ら」は虫損。他本により補う。○この春をのぶる心 この
春を長く延ばしたいと願う心。「のぶる心」は、末長い命とともに久し
く続く心のさまを重ねた表現。

〔通釈〕 孫の光昭の少将の家で、二月十日あまりの月がたいそう明るく
出ておりました時に

春の夜の団欒のままで生きながらえようと思うその心も、もしも命
が絶えないならば（そのまま思い続けるでしょう）。

返し

この春を長く延ばしたいと願う心のはじめから千年が過ぎるまで
ずっと、あなた様は長生きしようと思ひ続けてゆかれるのでしょうか
か（ご長寿とともにその心もきつと長く続くことでしょう）。

〔補説〕 中務の贈歌を受け、返歌では光昭が、「命が絶えなければ」と
おっしゃるが、その命は千年が過ぎても末長く続き、長生きしようと思
う心も続くでしょう」との意を込めて詠った。

一九四・一九五番歌

人に代かはりて。ある女をんな、同じ少将おなじに

いかにせん絶え間たまがちなる岩橋いわはしを頼たのみわたらんことのかたさよ

返し

葛城のつらき久米路くめぢの岩橋いはしのそなたも絶ことゆる心とぞきく

〔異同〕 をんな↓をむなに（西）、おなし少将に↓みつ明の少将（西）
みつあきらの少将に（歌）、くめちの↓くめちに（前・歌）、□ゆる↓た
ゆる（西・前・歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○人に代はりて 人の代作としての意。〔補説〕 参照。○同じ
少将 藤原光昭。一七五番歌。○絶え間がちなる岩橋 役の行者が大和
の葛城山の一言主に命じて、金峰山との間に岩橋を架設しようとした

が、自分の容貌の醜いのを恥じて、一言主が夜間しか働かなかったので完成しなかったという「久米路の橋」を指す。橋の工事の中断と男女の仲が絶えることを掛けている。○頼みわたる「頼みわたる」の「わたる」に、橋を「渡る」意を掛ける。「人知れず頼みわたると知るらめやかけりしふみのはしを見しより（和泉統・三〇一）」。○ことのかたさ「かたさ」は岩橋の縁語「堅さ」を掛ける。「種はあれど逢ふ事かたき岩の上の松にて年をふるはかひなし（後撰・恋四・八〇七 よみ人しらず）」。○葛城 大和国の歌枕。現在の奈良県西部、大阪府との境に位置する山系。修験道の拠点の一つで、一言主神の伝説が古くから有名。「葛城や久米路の橋にあらばこそ思ふ心を中空にせめ（後撰・恋三・七四 よみ人しらず）」。○つらき 苦しく思う意に、態度が冷淡である意を重ねる。○そなたもたゆる 底本は「そなたも□ゆる」。西本願寺本によって「そなたもたゆる」に校訂した。「そなた」は方向の意（あちら）と人称代名詞の意（あなた）を重ねる。上の句「葛城のつらき久米路の岩橋の」までが「そなたもたゆる」を導き出すための序詞。「葛城やくめぢにわたすいははしの中中にも帰りぬるかな（後撰・恋五・九八五 よみ人しらず）」。

【通釈】 ある人の代作として。ある女が同じ少将に

どうしたらいいでしょうか。絶え間がちな岩橋を信頼して渡ることが難しいように、途絶えがちなあなたを信頼し続けることは難しいことですよ。

返し

葛城の渡りづらい久米路の岩橋のあちら側が絶えるのと同様に、冷淡なあなたも、私への愛情が途絶えたお心だと聞いていますよ。

【補説】 一九四番歌の詞書には「人に代はりて。ある女、同じ少将に」

とあるが、この詠歌状況はいささか解りにくい。

歌の代作は、専門歌人など歌に優れた者が、歌合などの晴の場で歌を代わって詠んだり、プライベートの恋愛歌を知人、身内の代わりに詠んだ歌が多い。しかし、当該歌の場合は、中務が孫である光昭の恋人と思しき女性の代作をしていることになる。自分の身内ではなく、その恋人の代作をして、身内と贈答しているような例は他に見出せず、興味深い。なお、西本願寺本では、贈歌の詞書が「人にかはりて、ある女に光昭の少将」とあるので、一九四番が光昭の歌となっている。しかし歌の内容は、男の訪れが途絶えがちなことを不安に思う女の心情であるため、底本の通り、一九四番が女の贈歌、一九五番が光昭の答歌であろう。

一九六・一九七番歌

又返し

ことづくる君かつらぎの神よりも絶え間は我ぞ渡しわびぬる

返し

絶え間なく渡さましかばかつらぎの神もとけてぞ我たのままし

【異同】 わひぬる↓わつらふ（歌）、一九七番 返し↓又かへし（西・

歌）、神も↓神の（歌）、一九六番↓西本ナシ

【他出】 なし

【語釈】 ○ことづくる かこつける、口実にするの意。○君かつらぎの神「葛城の神」は葛城山にいたという一言主。「君かつらぎ」に「君がつらき」（あなたが冷淡）の意を掛ける。地名と掛詞になる例としては、

「わが恋にくらぶの山のさくら花まなくちるとも数はまさらじ（古今・恋二・五九〇 是則）」や「我ならぬ人住の江の岸に出でて難波の方を怨みつるかな（後撰・恋六・一〇二二 源整）」などがある。また、当該贈答歌では、葛城の神に男を仮託している。○渡しわびぬる「…わぶ」は「…しかねる」意。渡しかねる。橋を渡す意に、女性が男性を逢いに来させる意を掛ける。○渡さましかば「ましかばくまし」は反実仮想の表現。当該歌では「あなた（女性）がわたしを迎えてくださったならば」の意。○神もとけて「解く」は打ち解ける、気を許すの意。

〔通釈〕 又、返し

久米路の橋の絶え間にかこつけて、私を冷淡だというあなたよりも、葛城の神が橋を渡しかねたように、あなたの訪れが絶えた間は、私こそあなたを迎えかねたのです。

返し

絶え間なく岩橋を渡すように、あなたがいつも私を迎えてくだされば、私も打ち解けて、あなたも私を信頼してくれたでしょうに。

一九八番歌

人に代はりて

驚かであらましものを見も果てぬ昼間の夢の恋しかるらん

〔異同〕 をとちかく↓おとろかて（西・前・歌）、見えはてぬ↓みもはてぬ（西・前・歌）

〔他出〕 秋風・恋中・八五八

〔語釈〕 ○驚かで 底本「をとちかく」。他本が全て「おどろかて」で

あり、底本の字形から誤写も考えられるので、校訂した。はっと目覚めないで。「はかなしとまさしくみつる夢のよをおどろかでぬる我は人かは（和泉続・六二）」。〔補説〕参照。○あらましものを あつたらよかつたのに、又は、あつただろうのに（そうではなかった）、の意。「形見こそ今はあたなれこれなくは忘るる時もあらましものを（古今・恋四・七四六 よみ人しらず）」。○見も果てぬ 底本「みえはてぬ」。字形から誤写も考えられるため、他本に従って校訂。○昼間の夢 昼に見る夢の意か。「頼むとて頼みけるこそはかなけれひるまの夢のよとはしらずや（和泉・五〇〇）」「うちたゆむひるまの夢のおもかげは雲にもあらずあめにもあらず（夫木・一七〇五二 権僧正公朝）」。〔補説〕参照。○恋ひしかるらん どうして恋しいのだろうか、の意。「わが心いつならひてか見ぬ人を思ひやりつつ恋しかるらん（後撰・恋二・六〇三 紀友則）」。

〔通釈〕 人に代わって

はっと目覚めないでいたらよかったのになあ。見果てることもない昼間の夢のような短い逢瀬がどうして恋しいのだろう。

〔補説〕 「驚く」は、和歌では、「はっとさせられる。気づかされる」の意で用いられるのが一般的で、特に平安時代は、当該歌のように「眠りから覚める」意を含む用例は少ない。当該歌に先行する明確な例は見当たらないが、同時代では次の例が当てはまるかと思われる。

屏風のゑに、正月野にいでて子の日する所、四帖が歌

驚のはつ音にけふはおどろきて春の山べにをりくらしてん（兼盛・

一四二）

さらに、「昼間の夢」も用例の少ない表現である。「語釈」に挙げた『和泉式部集』と同様に、短くはかない逢瀬を言うのであろう。或いは、当該歌でも、『和泉式部集』でも、「昼間」には「袖のひる間」や「露のひ

る間」等のイメージを重ねているのだろうか。

また、当該歌はどのような状況での代作なのか、詳しいこともわからないが、言葉や主旨は、次の歌にも類似していよう。

あひ見でもありにしものをいつのまにならひて人の恋しかるらん
(拾遺・恋二、七二二 よみ人しらず)

一九九・二〇〇番歌

五日、琴弾きて

あやめ草今日を恋ひつつ水隠りに忍びたるねもいつか絶ゆべき

逢ふことをいつかと知らぬあやめ草ひく琴のねも甲斐なかりけり

〔異同〕 なし (底本・御所本のみの所収歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○五日 歌の「あやめ草」から見て、五月五日。○水隠り 水中に隠れること。又、胸に秘めて人に語らないこと。「池水のいひいづる事の難ければみごもりながら年ぞへにける(後撰・恋四・八九〇 敦忠)」。○忍びたるね 「ね」は「根」と「音」の掛詞。ふつう、菖蒲の根と人やほととぎすの泣き(鳴き)音を掛ける。「五月雨の玉にぬくひをあやめ草ねにあらはれてなきぬべらなり(躬恒・八四)」「足引の山郭公けふとてやあやめの草のねにたてて鳴く(拾遺・夏・一一一 延喜御製)」。ここは、菖蒲草の根と、密やかな琴の音色の意を掛けるか。〔補説〕参照。○いつかたゆべき いつ絶えるだろうか、いや絶えることはない。「よとともにちらずもあらなむ桜花あかぬ心はいつかたゆべき

(後拾遺・春下・一三三 平兼盛)」。或いは「いつか」には「五日」の意をも響かせるか。〔補説〕参照。○いつかと知らぬ 「いつか」は「何時」と「五日」の掛詞。「いつかとも思はぬ沢のあやめ草ただつくづくとねこそなかるれ(拾遺・恋二・七六七 よみ人しらず)」。○ひく琴のねも 「ひく」は「引く」と「弾く」の掛詞。

〔通釈〕 五月五日、琴を弾いて

あやめ草は端午の節句の今日を恋い続けて、水中に隠れている根も絶えることなどないように、密やかに弾く琴の音色も絶えることはない。

あなたに逢う日を何時と知らない私は、五日を知らずにあやめ草の根を引くことが甲斐がないように、弾く琴の音色も甲斐がないことだ。

〔補説〕 詞書に「琴を弾いて」とあるので、ここでは二首とも「琴」とからめて解釈したが、一九九番歌は、琴と全く切り離れた恋歌としても解釈が可能であろう。五月五日の贈答の一つに、

五月五日、おなじひと

あやめ草ねもころみであふことをいつかとまちし今日はくらしつかへし

待ちきける今日すぎぬればあやめ草今はいつかもあらじと思ふ

(元真・四四・五)

があるが、このように自分を「あやめ草」に喩えて、「ね」(ここは根と寝)、「いつか」(五日、何時か)等の掛詞を用いる歌が多い。当該歌二首も、「ね」(根と音)と「いつか」を掛けており、同工異曲である。また、一九九番は男側からの贈歌で、二〇〇番歌が女側が琴に関連づけて返歌したものと見ることも可能ではないか。その場合、男が「私の胸の

うちの秘めた恋心が絶えることはない」と言い掛けたのに対し、女が拒絶する遣り取りと考えられる。或いは二〇〇番歌は、

同じ日（五月五日）、忍びたる人に

今日とてもひきにやはくるあやめ草人しれぬねはかひなかりけり

（和泉式部続・五一六）

のような、男の不実を嘆く歌と見ることもあながち不自然ではない。このように様々に考えられる二首である。

二〇一番歌

ほかより来たる。前、たゞ葎のあるを、

うき世をも厭ひかねては嘆きつゝ、宿の葎に年をこそつめ

〔通釈〕 他の場所から移り来た。前庭に、ただ雑草ばかりが生えているのを、

辛い世の中をも、厭い避けることができずに嘆いては嘆き、この宿の雑草の中で齢を積むことだ。

二〇二・二〇三番歌

娘の君蟬の鳴くを。井殿とこそ。

夏深き嘆きをふかくあるものをなどめづらしき蟬の初音ぞ

をのづから末も栄ゆる枝ならば時知る蟬の声も惜しまじ

〔異同〕 なし（底本・御所本のみ所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○夏深き 晩夏の蟬を詠む例として、やや後代だが、以下のような歌が確認できる。「蟬声夏深／秋風もかよふばかりの梢より松をはらふや蟬のもろごゑ（寂蓮・三七〇）」○嘆きをふかく ひとまず校訂は行わなかったが、「嘆きもふかく」などとあつてほしいところ。底本影印では、「を」の右に「本」の傍記がある。「を」は不審だが、親本のまま写した」ということを知らせる傍記かと思われる。○蟬の初音 蟬の初音（初声）を詠む歌は、当該歌の他に見出し難い。

〔通釈〕 娘の君が、蟬が鳴いているのを。井殿の歌だという。

夏が盛りを過ぎた嘆きも深いものであらうに、なんと聴きごたえのある蟬の初音であることよ。

自然に梢が栄える枝のように、子々孫々が栄えるならば、夏が終わり、命が終わる時を知る蟬も、声を惜しまないのです。

〔語釈〕 一首目「夏深き」歌の詞書には、井殿の作だと伝わるものが記され、続けて二首目が記されているが、「をのづから」歌は中務の詠と捉えるべきだろうか。「末さかゆる」とは、子孫の繁栄、栄達を、蟬の留まる枝に託して暗喩する表現である。晩夏ながらも勢いよく鳴く蟬を賞美する娘の歌を受け、やや達観した立場から、母・中務が「命が引き継がれ、脈々と栄えるならば、命短い蟬も声を惜しまないでしょう。私もあなたたちの為ならば力を惜しみませんよ」と応じたと考えるのが穏当と思われる。

高野 晴代（日本女子大学教授）
高野瀬恵子（日本女子大学非常勤講師）
加藤 裕子（日本大学大学院博士課程後期単位取得満期退学）
森田 直美（実践女子大学非常勤講師）
斎藤由紀子（日本女子大学大学院博士課程後期単位取得満期退学）
遠間 倫世（日本女子大学附属高等学校教諭）
時田 麻子（日本女子大学大学院博士課程前期修了）
曾和由記子（日本女子大学大学院博士課程後期在学）